

# 浪江の

# こころ通信

・第47号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第47号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218

## 再取材シリーズ

### 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から4年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。





群馬県

## 牛来 美佳さん(川添)

取材者：浪江町役場 三瓶・中川  
取材日：4月2日

### またあの場所で、 浪江の空の下で、 みんなに会いたい

今年3月に新曲「いつかまた浪江の空を」をリリースし、充実した音楽活動を展開中の牛来さん。前回の「こころ通信」ご登場は3年前のことです。先般、活動を通じて集めた義援金を役場にお持ちくださった際に (p10参照)、いまの想いを伺いました。

牛来さんオフィシャルウェブサイト <http://mica-gorai.jimdo.com/>



#### ■みんな待ってて！と思いつつ 作った最初の曲

詩を書いたり作曲らしいことを始めたのは小学生の頃でした。震災前からライブハウスで歌っていましたが、腰を据えて曲作りに取り組んだのは、震災の翌年に出したファーストアルバムが最初です。お世話になったライブハウスの店長さんから、こういうときだからこそ音楽やらないか、と言われて。震災の3日後に携帯につづった詩に音楽を付けたのが「浪江町で生まれ育った。」です。その後は様々なイベントにゲストで呼んでいただくことが増え、昨年3月からはワンマンライブも開始しました。合わせてオリジナルグッズの販売も始め、1年間の売上をこのたび町に寄付させていただきました。

震災後、「家に帰れない」ということがわかったとき、こんなことが起こるなんて、もうとにかく悔しくて。その気持ちを伝えるには音楽しかなかった。最初の曲は、「みんな待ってて、いま歌うから！みんなの気持ちを歌うから！」と思いつきながら作りました。そのときの悔しさは、今でも変わりません。それに今は「風化」の悔しさが加わっています。よく「帰らないの？」と聞かれるんですよ。帰れないという状況にあることすら知られていない。ライブでは、浪江の現状をお話するほか、毎日の当たり前の幸せをどうか忘れないでください、という話もしています。

#### ■今の自分にできることを

私のライブを聞いて、今の自分にできることをしようと思った、と言っていただけなのがしばらくうれしいですね。その際、浪江のため、被災地のために何ができるか考えるのも大事ですけど、具体的にはなかなか難しいと思います。だから、「できること」というのは、(被災地の困難な状況を)自分に置き換えて考えるということだと思えます。目の前にある課題から逃げないこと。諦めず、ひとつずつ悩み苦しみを乗り越えていくこと。それも大震災から学べることのひとつではないでしょうか。

今年3月にリリースした「いつかまた浪江の空を」は、文字通り「あの空の下で、またみんなに会いたい」という想いを込めた歌です。海がそのままだ反射しているような浪江の空は、とにかくきれいで、またみんなに会いたい。そうなんです、浪江町で会いたい。



◀ご来庁いただいた日は、牛来さんの笑顔のような、気持ちのいい晴天でした。



山梨県

## 森野 俊恵さん・裕子さん(川添)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：3月15日

### いつか浪江に帰れる日を願い

俊恵さんの勤務地となった山梨での暮らしも4年近くなり、今は、孫の祐輝くんの成長が楽しみという森野さん夫婦です。



▲左から 裕子さん、娘の美恵さん、孫の祐輝くん、俊恵さん



▲愛車と一緒に

#### ■大家族での暮らし

震災前、我が家は、私たち夫婦と母、長女夫婦、次女、孫たちと総勢10人の大家族でした。

私も妻も孫たちの面倒をみるのが楽しみでした。孫の友だちが、学校帰りに「ただいま！」と言って遊びに来たり、近所の人が「こんにちば」と立ち寄り、新聞を見てお茶を飲んで帰っていきような家でした。私は猫が趣味で、猫友会に入り害獣駆除をしていましたが、猫友会の仲間の飲み会も我が家で、しばしばやりました。

#### ■山梨に来て

震災の時、母は近くの施設にショートステイしていました。母のことも気になりましたが、何より幼い孫たちのことが心配で、妻と娘たちは避難指示を聞いてすぐに、車2台に分乗して、栃木、千葉、いわきと転々と避難しました。その後、5月に日立パワーデバイス南相馬工場から山梨工場に勤務地が変わったので、山梨に来ました。

4年近く山梨で暮らしたことになります。今は、私たち夫婦と次女、孫の祐輝の4人暮らしです。長女夫婦は、いわき市で暮らし、山形の福祉施設に入居していた母は昨年12月に亡くなりました。震災がなかったら、みんな賑やかに暮らしていたら

れたのにと思うと悔しいですね。山梨に来てしばらくして、こちらの猫友会に入らないかと誘われましたが、住民票を移す必要があり、帰る時のことを考えやめました。

#### ■散歩道が違う

私は、日立パワーデバイスでシニア社員として今も働いています。次女も同じ工場に働いていますので、日中は妻が一人です。山梨に来て、周囲の人たちにとってもよくしてもらいましたが、浪江とは風景が違います。浪江に住んでいた頃は、妻と二人でよく散歩しました。山に行けば、散歩がてら山菜取りもでき、川に行けば、アユ獲りができました。散歩といっても、ただ歩くだけのことになってしまいました。

娘たちは、もう帰らないと言っていますが、私たち夫婦は帰れる時が来たら帰りたいと思っています。ただし、人の世話になるだけではなく、猫の腕を活かし害獣駆除をする等、人の役に立てる年齢のうちには思います。今は、帰れる日に思いを馳せて暮らしています。

#### ■あきらめる理由はない

現実的には、避難指示が解除されてもみんなが戻るのには難しいと思います。私もやはり、小学生の娘のことを考えますから、「帰りたいけど帰れない」状態は変わりません。でも、想像はしますね。将来は浪江に帰って浪江から発信することもできるかなど。これまで築いてきた音楽のネットワークを生かして、たとえば3月11日に浪江と申すにつれて各地で同時ライブをやるとか。そういう「妄想」はいっぱいありますよ。

あきらめる理由はないって思うんです。難しい現実はあるけど、そこにみんなが存在していた、もう一度その姿を見てみたい、あの場所でもまたみんなに会いたいという想いに、叶うのかどうか？という問いは要らないと思っています。